



wischen der Leine und der Weser war gelegen die Grafschaft Hallermünd, vor Alters eine der vornehmsten unter den sächsischen Grafschaften. Sie lag wie eine Perl in Golde, oder wie das Honigmagazin einer lieblichen Blume ringsum mit buntfarbigen Blättern gezieret, mitten inne zwischen

愛の信実まこと——あるいはマルブル—風お伽話⁽¹⁾

ヨーハン・カール・アウグスト・ムゼーウス著

鈴木満訳・注・解題

ライネ川とヴェーザー河の間にハラ
ーミュント伯爵領⁽⁴⁾があった。昔むかし
のその昔にはザクセンの伯爵領のうち
で飛び切りの一つだった。黄金の指環
に嵌はまった真珠のように、あるいは、
多彩な葉っぱにぐるりを飾られた可愛
らしい花の蜜の貯蔵庫「雌蕊^{めしべ}」のよう
に、他の多くの伯爵領の真ん中に位し、
日の出の方角「東」ではポツペンブル
ク伯爵領、日の入りの方角「西」では
シャウムブルク伯爵領、真昼の方角
「南」はシュビーゲルベルク伯爵領、

真夜中の方角「北」ではカーレンベルク伯爵領と境を画^かしていた。エルダクゼン⁽⁵⁾から程遠からぬ城の大手への登り路の左手にある石段の基部の近くに城壁と追持^{アヒサ}がまだに見られる。これらの遺物がハラーミユント伯爵家のかつては壮麗堅固だった居城の廃墟なのである。ハインリヒ獅子公^{デア・レウエ}が旅の道連れである忠義な獅子とともに、面倒見の良い魔物^{デーモン}の背中に乗ってパレスティナからブラウンシュヴァイク⁽⁷⁾へある夜かの有名な騎行を行い、元氣潑^{はつらつ}瀾かつ上上のご機嫌でその地に到着した頃、あるいは、それよりさほど経ってはいない時期、ハラーミユントにハインリヒ勇敢^{デア・ウァッケレ}伯爵が奥方なるオルデンブルク伯爵家出のユッタと暮らしていた。ユッタは徳と美の典型として同時代の人人から賞賛され、あの素描集の著者⁽¹⁾が、全^{ニトイ}下^{ライ}ザクセンの市町村の、現在ご存命である美しくも立派な名流のご婦人方にああも賢く割り当てることのできたさまざまな才能と完璧さを一身に兼ね備えていた。彼女の属する性「女性」の中でもかように珠玉のごとき存在を妻にできたので、ハインリヒ伯爵は当然ながらこの世で一番幸せな夫であり、淑徳高きユッタを、始祖アダムがあらゆる生きとし生ける者の母「エヴァ」——彼らのごときたぐいはもはや見出されることは無くなった——をあの楽園の罪無き世界で愛したように、確固不動の誠実さで愛していた。一方高貴な伯爵夫人も旦那様にこよなく優しい愛情を傾けてかしずいた。この愛情たるや、見知らぬ形象を受け止める水銀塗料を背面に塗られないないぴかぴかに磨かれた鏡の硝子さながら純粹無垢。

この素晴らしい夫婦^{めつと}の好みと願いは、悉^{ことごと}くお互い同士の穏やかな共感に溶け合い、愛が心の吐露に捧^{たも}げる懇^{ねん}ろな数刻、互いに思いの丈^{たい}を披瀝^{ひれき}する時いつも二人が張り合うのは、男心と女心のいずれがより強く、より長続きのする炎を燃やせるか、の一点のみ。そしてかような観念的論争はともすれば幻想の領域に滑り込むものだが、兩人は現世の愛の享楽だけに満足しなかった。人生は彼らの至福の大きさに対して余りにも無常迅速に過ぎる、と思われ、彼らが最も好んだ語^{ことば}らいは通常、相思相愛の者たちが彼岸でどうなるかについての情感的⁽¹²⁾に宗教的な考察に関するものだ

つた。女性らしい優しさが、ほどほし逆のに任せて伯爵夫人はしばしば夫に、あなたがいらつしやらなければ天国の喜びも不十分にしか味わえませぬ、私の守護天使と一緒にあなたと別れて暮らすことの埋め合わせにはなりませんまい、と断言するのだった。将来靈魂がどこに滞留するかについての彼女の宗教的考えは不安と希望の間を揺れ動いていた。信実の愛が再合一するための落ち合い場所を煉獄とすべきか、天国の前庭とすべきか、不案内だったからである。それから黄泉よみの国には無数の住民がいるわけだから、勝手が分からなくて再会できないのでは、というさまざまな疑念も念頭に浮かぶのだった。と申すのも、あの世のことどもに関するご婦人連の学説ほど、天界の階級制度ヒエラルヒーについての變てこりんで混乱した見解は容易に見つかるまいからね。「ああ」と伯爵夫人は優しい愁いを籠めて再再言つたもの。「私たち二人が同時に暗いお墓に入つてまどろみ、こうもびつたり絡み合っている私たちの魂が結ばれたまま、守護天使様たちが、行く末はここ、とお決めになつていらつしやる場所に急いで行けるよう、あの方たちのご配慮で決められておりましたらねえ。そうすれば私どもの魂はお互いを楽しむという喜びを一瞬でも欠かさずに済みますのに」。なるほど伯爵はこうした願いに賛同しはしたが、彼岸での再会に関しては奥方ほど心配していなかった。彼の理論によれば、天界の警察は極めて良く整っているのであった。戦人いくさじんである彼は身罷みまかつた靈魂の行く先を秩序整然たる陣営に警たどえた。そこではね、簡単に路が分かるのだよ、と。また、一生の長さの違いによつて生じる別離も、早く戻りたいなあ、と願うのも快いし、無事帰宅すればこれまた嬉しい、国内旅行の折の数日みたいなものだろう、と彼には思えた。伯爵は、あの世でも騎士道のもろもろの掟を忘れまいぞ、たとえ天界の途方も無い広がりあまたを数多あまたたび過ぎつて、無慮無数の黄泉よみの国の亡霊たちの中から妻を探し出さねばならぬとしても、再び見つけるまでは想あまたうことはあるまいぞ、と大いに意気込んだものである。

この対話が行われた部屋には当時の好尚に従つて、食卓の装飾として死の舞踏トリーテンタッツが描かれていた。こうした恐ろしい



群像の一つに、気の置けないおしやべりに打ち興じている愛し合う一組の男女の図があった。死神が入って来て、乙女を輪舞に誘う。男の恋人の方は骸骨殿を目にすると、それまで可愛いひとを抱いていたらしい片腕をだらりと落とし、相手から引き下がって、自分の傍らに座っている少女の体にもう一方の腕を絡ませ、その胸に顔を埋めるのである。「ご覧なさいまし、いとしい旦那様」と伯爵夫人が言った。「男の方の信実がどんなものかという一つの証でございますわ。女はこのような気紛れな恋はいたしません。可愛いひとはまだ冷たくなっておりませぬのに、彼女の不実な恋人の胸の聖なる火はもう消えてしまっている。ああ、渝らぬ愛の記憶を持ってこのひとは世を去って行く。もしいつの日にか恋人の亡霊がだれか他の女と連れ立っているのに出逢いましたら、憩いの園でのこのひとの平穩は乱されるのではないでしようか」。こうした物思いがひどく激しく伯爵夫人の優しい心に影響を及ぼしたので、胸の裡でこれを嘆き悲しみ、静かな涙が彼女の薔薇色の頬を流れ落ちるのだった。空想に浸りきっている愛妻のこうした悩みは温和な夫を心底動揺させたので、彼は優しい言葉でこう相手を慰めた。「純愛と申すものは諸行無常のうちには入らぬ。一つに合わさつた二つの魂は、天国とこの地上との間に設けられている大いなる濠でも分かつことは叶わないのだよ。我らの誓いのごとき誓いはあの世でも解消できはせぬし、我らを揺るぎ無く結び付けてくれる。そこでね、そなたがその証、その徴を持てるように、この身は良心と騎士の名譽に掛けて約束いたそう。もしそなたが——さようなことがありませぬよう、神よ、守りたまえ——死によって我が身から連れ去られようと、こなたは再縁など念頭に上すまいぞ。して、この身の方が先立つ場合は、同様の

ことをそなたに期待いたす。いや、死後この現世へ戻ることが意のままになるなら、枷・鞭を持たぬ我が精神に二人の絆を銘記させ、そなたにそれを想い起こさせに参上いたそう。約定の印に手を打つがよい、いとしい妻よ、我らの絆が心と手双方によって永久に確約されるようにな。この提案は、亡くなった者たちの境遇についての揺れ動く諸説を基に、伯爵夫人がかねて組み立てていた感傷的な考えに見事に合致したので、まさに自分の心から出たものように思えた。あの世での彼女の愛がこのように保障されたので、奥方は大いに慰められ、大いに安堵し、死が奪う時それを回復する、あの世間一般の再婚権をいそいそと放棄した。こうした結婚協定の象徴として伯爵夫人は二色の絹布をほどこけないよう固く縛って愛の結び目を作った。希望の色の緑と悲嘆の色の黒である。これは、後に残された方が渝ること無き愛を胸にしつつ、やがて悼まれた方を元通り愛することができるようになるう、との希望を象徴。これで彼女は二つの徴をこしらえた。一つは背の君のため。これをこちらは伯爵位を示す鎖に飾り紐として結んだ。一つは自分自身のため。これを彼女は頸飾りとして麗しい胸の谷間に身を隠す心臟型の黄金細工に結び付けた。

その後間もなく伯爵は配下の騎士の面々のために素晴らしい饗宴を催し、日頃の習わしに従って、客人たちとともにたくさんの気晴らしや盛大な競技を行った。なにせ、贅沢と娯楽が大好きだったから。竖琴奏者や提琴弾きが大いに耳を愉しませ、ハラミユント領内ではだれもかれも上機嫌で喜色満面だった。折しも優しいユツタが旦那様の腕に縋り、陽気な踊のために美しく装い、舞踏会を開始しようとした時、一人の伝令官が太鼓の響きを先導に城に到着、傾聴を要請した。伯爵は、鎖帷子を纏った深刻な顔つきの男が何を申し入れに来たのか聴き取れるよう、すぐさま喧しいさんざめきに静粛を命じた。伯爵夫人は恐怖と胸苦しさに色蒼褪めた。伝令官の知らせが彼女には梟の叫び、鴉の啼き声のように思え、いとしい旦那様への宣戦布告か、一騎打ちの果たし状ではないか、と推し量ったので。けれど、伝令官が招じ入れられ、その胸に実家の定紋が付いているのを目にすると、いくらかほつとした。さて、

使者は恭しく伯爵に低頭し、口上を述べ始めた。「オルデンブルクの伯爵ゲルハルト、殿の義弟にして相互相続契約を交わせし盟友は、騎士道の慣わしに従い、三日後、殿の強いお腕、およびご家臣の騎士の方もろともに、ゲルハルトと断交いたせしシユテインガーの輩討滅の出撃にご加勢、お味方を賜りたく、切に懇請したてまつる。ゲルハルトのかようなしかるべきお願いをご兄弟の誼にてご聴許戴けまするなら、このお返しに今後とも何であれご随意のご奉仕を喜び勇んで相務める所存でございます」。

ハインリヒ伯爵は伝令官にあつまりと相応の回答をし、たつぷり被け物を与えて下がらせた。彼自身はそれからすぐに舞踏の広間を後にした。かくして飲びの神殿は一挙に戦いの武器庫と化し、横笛吹きと豎琴奏者の柔媚な和音は恐ろしい物の具の響きを取って代われ、殿方征服を志していた輝かしい舞姫たちが憤慨したことに、折角の楽しみ事は伝令官が介入したせいで、周知の椅子合戦によるトゥーロンの大舞踏会（一）と全く同様不快なものになってしまい、急転直下めちやくちやにされた次第である。さつきまで白銀の皿に載せた焼き菓子や肉饅頭、黄金鍍金の高脚杯に注がれた葡萄酒を食卓に運ぶのに忙しかった下僕たちは、今度は主君とその騎士たちの装備を武器庫から運び出すのに熱中。甲は験甲付きの冑、乙は堅固な胸甲としなやかな臙当で、丙は鋼鉄の盾を、丁は槍と両刃の騎士の大剣をとという具合。優しいユツタは侍女たちの手助けを受けながら自身震える手で羽根飾りを整えた。これは冑を覆い隠すほどのもので、背の君の紋章の色合い通りの赤と黒。それから伯爵は従士の介添えて甲冑を着用、曙初めると、主馬頭に命じて誇らかに馬勒を付けられた軍馬を牽き出させ、扈従の家来ともどもひらりと鞍上の人となつた。ああ、大事な夫が情愛籠めて麗しの伯爵夫人を抱き締め、その魅惑的な真紅の唇に苦い別れの接吻をした時、彼女は悲嘆の叫びを挙げ、双手を揉み絞り始めた。さながら晝刻花咲き乱れる野に滴り落ちる露の天界の源泉のごとく、その目からは涙が生まれ、涙はいとも愛らしい頬に静かに注いだ。腕と腕をしつかり絡めて夫の唇を唇をびた

りと合わせ、ご機嫌よろしゅう、この恐ろしい別離の言葉を口から出すことがどうしてもできぬ。伯爵はこうした感傷的な状況を短縮し、妻の苦悩に満ちた情念から身を挽ぎ放そうとしたが徒勞だった。磁石のような力で夫人は夫をまたまた高鳴る胸に引き寄せたが、漸く気を取り直し、物言う氣力を回復した。

「おさらば、大事な背の君様」

「さらば、心底いとしいそなた」

「何千回もおさらばを」

「すぐまたそなたの許もとに戻ろう」

「ああ、いつそれが叶います」

「まこと、しかとは分からぬな」

「ねえ、いつごろとお考え」

「復活祭オイステルンにはなんとか、と思うておって欲しいもの」

「ああ、あなた様を抱ければねえ」

「降臨祭フイリグステンには必ずな。

また逢えるのだ。

別離などさてなにほどのことがあろう」

こうした陰鬱な挨拶を交わして情の深い夫妻は別れを告げた。



伯爵は馬鎧を着せた駒に力一杯拍車を掛け、野外の春の耕牧地へ出るとほっと楽に息を吐いた。奥方の懊惱(あうのう)にきつく胸を締め付けられていたからである。伯爵夫人はというと、城の鋸壁(きよへ)に登って行き、夫の兜から羽飾りが靡(なび)くのが遙か彼方に見える間中、旦那様を想ってしくしくと嘔(えず)り泣いた。それから自室に引き籠ると、断食と苦行(くぎん)に身を懲らし、ありとあらゆる聖者方、とりわけ天使ラファエル(22)に誓願し、昔青年トビア(23)の道連れになったように、旦那様の身に添い、トビアの守護天使同様確実につつがなく生まれ故郷に連れ戻してくださいまし、と祈ったのである。伯爵夫人にはイルヴィンという名のもとでも綺麗なお小姓がいた。彼は宮中のもろもろの祝祭の折、それから夫人が教会に詣(ま)でる時にはいつも、その裳裾を持つのがだったが、これを彼女は伯爵とともに出征させ、主君の傍から決して離れず、忠実な盾持ちとして随き従い、主君が戦争熱に浮かされて命を危険に曝(さら)そうとするようなことがあったら、愛のために身の保全を考え、大胆不敵な冒険家みたいに危いことを試みないで下さい、と慎ましやかに思い出させるよう、と厳しく言いつけた。イルヴィンは麗(うつく)しい女性(にょしやう)の命令を肝に銘じ、影法師(かげぼうし)のように伯爵にくつついて廻(まわ)った。この勇敢な戦士は、名譽と騎士道の掟(おきて)が許す限りは忠実な小姓の勧告に従う、と誓ったからである。

伯爵夫人の感じでは夫の留守の日日はのろのろだからと打ち過ぎて行つた。彼女は一刻一刻を救えた。太陽が西の山に沈むと嬉しかった。なぜなら一日が終わるたびに憧れの目標に一步近づいた、と思つたからである。けれども時の進行は弾(は)み車(ぐるま)のようなもの。はかない希望の息吹を吹きかけられても早く回転しはしないし、押し留めようとおせっかいな手が輻(や)の間に差し込まれても、その一定不変の動きが妨げられるわけではない。そういう次第で復活祭(オーステルン)は時間単位の要求通り、一時間早くも、一時間遅くもなくやって来たので、善良な伯爵夫人は日日の不当な遅滞(オーステルン)にひどく文句を言った。しかしハインリヒ伯爵は帰還しなかつた。そこで夫人は今度は復活祭(オーステルン)から精霊降臨祭(フラインググースペン)までまたしても時の計測を開始。それまでのまだまだ長い五十日が彼女には待ちきれない。五十日は胸一杯のいらいらした渴望

には永遠なのである。「ああ」と奥方は溜め息をついた。「葡萄の木にはまだ芽が出ない。風は枯れた藪の上でざわめいている。ごつごつとしたハルツ山地はまだ雪の頭巾を被ったまま。そしてうちの旦那様がお戻りあそばす前に、森は緑にならなくては、葡萄の木は花を付けなくては、ハルツのお山は冬衣装を脱ぎ捨ててはいけないのねえ。ああ、我が魂のいとお方、あなたはなんと長いことご勝利の月桂樹の木蔭にのんびり逗留なすつてらっしゃるの。独りぼっちのこの私は恨み焦がれて憔悴しやうすいしておりますのに」。

こうして情愛籠めてかきくどくうちにも夕べと朝あしたはいつも一日となり、その一日は五十の数を減らして行った。そして伯爵夫人の苦しみでさえも、希望に満ちた期待とまたしてもそれを裏切られるのではないかとの恐れとの間を揺れ動きながら、延延と続く時間の一部を消してくれた。雪は溶けて川となり、葡萄はすすく育ち、辺り一面に緑の若葉が生い茂り、教会では「創造主ツェーニ（つくくりぬし）」なる精霊よ、来たりたまえ（25）」が歌われた。しかしハインリヒ伯爵は相変わらず凱旋せぬ。

いつもは美と若さとともに一つ屋根の下に住みたがる軽やかな朗らかな心根の持ち主なのに、今や心煩う夫人の魂は悲しい予感の数々に戦慄した。かつては陰鬱な心配ごとなど全く払いのけたのに、高貴な伯爵夫人がひたすら耽るのには不安な物思ひだけ。彼女は蠱惑こわくの朝の装いを纏った美しい自然を見ず、夜鶯ナハテイガルの柔らかなく甘い声を聞かず、芳しい花の香を嗅かがず、城の花園の色とりどりの百花繚乱にも魅せられなかった。暗然としたその目はじっと伏せられたまま、締め付けられたその胸から押し出されるのは高い嘆息。お付きの乙女たちは思い切つて慰めることも、おしやべりで愉たのしませることも叶わず、しんと押し黙り、熱い涙を流して女主人の苦しみに同情するのが関の山。こうした深い沈黙が破られるのは朝の挨拶の折、奥方様のご覧になった意味ありげな夢の数数を解釈するため。夢は時時はただ象徴的に、抜け落ちた一本の歯とか一連の数え珠とかで死亡と悲哀の涙を予言、また時時は直截ちよくさかいに墓場と棺台

の間を彷徨い、盾と紋章の掛かった柩とかいった身分に相応しい葬列を示すのだった。そして伯爵の館の明るい日中でさえこれと符節を合わせたようなことが起こった。真昼刻、婢女たちが奥方の食事の給仕をしていると、大きい音が部屋中に響き、伯爵夫人は仰天して椅子から飛び上がった。何事か、と見やれば、食器台に置いてあった伯爵常用の酒盃が上から下へ転げ落ちたので、微塵に砕けてしまったのである。

居合わせた者たちは悉く蒼腿め、顔にまざまざと狼狽と驚愕

の表情を浮かべた。そして伯爵夫人はこう言った。「ああ、神様、あらゆる聖人様方、お憐れみ下さいまし。これは旦那様のこと。身罷られたのだ。お亡くなりになったのだ。死んで冷たくなってしまわれたのだ」。彼女はその時からというものはや口を利くこともなく、啜り泣き、かきくどく他何もしなくなった。

それから三日後、夫人はなんと名状しがたい異様な予感がした。何かひそやかな虫の知らせで、旦那様についての便りが来るだろう、と思ったのである。そこで彼女は物見の塔の高い張り出しに登り、伯爵が出立した折進んで行った街道を一心不乱に眺めた。目を上げると一人の騎者がこちらへ疾駆している。まっしぐらにどんどんやつて来る。そしてその背後では尻尾が長く延びて跳ね上がったたり、だらりと下がったり、さながら高い檣の上で風に弄ばれている燕尾旗のように靡いている。駒は黒馬、騎り手は黒衣、駒の目指すはまさにこの城。大手門の前に着いた時、ああ、ユツタはそれがイルヴィンであると分かった。黒い喪服に身を包み、丸い鍔付き帽子から長い黒の紗「喪章」が馬の蹄まで垂れ下がっているのだ。「ああ、イルヴィン、可愛い私の小姓」。伯爵夫人は悲しみに身も世もなく高い



張り出しから呼び掛けた。「どんな報らせを持つておいでだ。言うがよい。殿はいかが召されたか」。イルヴィンはすっかり泣き顔で声を張り上げる。「おお。お優しく情の深い奥方様、ひどく悪いものでございます、持つて参りましたお報らせは。大層たくさんの涙をお美しい御眼は流さねばなりません。花冠を黄金色のお髪からかかぐり捨て、薔薇色のお召し物を黒い粗毛織と黒い紗にお着替え下さい。——ハインリヒ伯爵様はご逝去あそばしました。死んで氷のように冷たくなっておられます」。『おお、凶報の使者よのう』。伯爵夫人は叫んだ。「おお、苦惱と悲嘆に満ちた報らせよのう」。『こう言うやいなや、冷たい戦慄が彼女の四肢を震わせ、もろもろの死の翳りに五感は全て朦朧となり、両膝はわななき、彼女は気を失って、待つていた腰元たちの腕の中に崩折れた。伯爵の死の報知が、それを確認する弔鐘の鈍い調べと一緒に拡まると、ハラミューント伯爵領全土に哀悼の声が高く響き渡り、宮廷の忠実な召使たちは全ての領民ともどもに良きご主人様の死を嘘偽りなく嘆き悲しんだ。

さはさりながらあらゆる激情の中で心痛というやつは生活を破壊する傾向が最も小さい。あらゆる苦惱を泣いて泣いてたやすく胸から押し流してしまう涙もろい性「女性」にあつてはとりわけ然り。そういう次第で打ちひしがれた寡婦は悲しみに負けはしなかった。背の君のいとしい亡魂がまだ永遠への旅路の途中にあるうち、憧れに翼を添えられた彼女の霊が追いつけるよう肉体をかなぐり捨てたい、としきりに望みはしたけれども。しかしながらこのたびはその願いは叶わなかった。それにまた、そこに宿るよう割り当てられたこの魅力的な住処を彼女の魂がかくも性急に出了がったとしたら、真つ当なこととは言えませんよね。だつて綺麗で快適な宿を撥ねつけて野天で暮らすなんて元来我儘勝手もいいところ。いつ何時崩れるかもしれない煤ぼけた小屋、あるいはあばら家に住んでいるなら話は別だ。それなら、こんなところから逃げ出したい、と思つても許せる。家の骨組みの梁がどれもこれもみしみし軋んでいる場合、どこぞの老女が解体工事を切望するとしたら、こうした妥当な要求にしかるべく反論するなんてできっこ

ない。しかしうら若いぴちぴちした乙女が、脳裡の感傷的な弦の調子がどこか一本狂ってしまつて、もしくは恋に破れたために、墓場の臭いがぶんぶんするような科白を吐くのだったら、それは思ひ上がった銜いと申すもの。麗しのユツタは、夫の道連れになろうと血管を開かせた賢人セネカの妻のように、旦那様ともろともに死のう、と思つた。さてセネカの妻だが、夫はずつと早くに失血していたのに、自分には死がなかなか訪れなかつたので、忠告に従い、急いで傷に包帯させた。逃れ去つた夫の靈魂はもうあまりにも先に行つてしまつて、追いつけない、と考えたから。激情の最初の嵐が穏やかな涙の雨に移行し、春秋に富む寡婦の千千に乱れた心がいくらか落ち着きを取り戻すと、彼女は、旦那様の不幸な運命について詳しい報告を聴くため、忠実なイルヴィンを召し寄せた。

ユツタは、城で符節を合わせた事件が起こつた同じ日の同じ刻限、伯爵たちの同盟軍がシュテインガー人に対し兵を進め、昔烈な戦闘を始めたことを知つた。ハインリヒ伯爵は真つ先駆けて敵勢に突進したが、合戦の混乱の中で敵の戦斧がその鎧を劈き、それから致命的な投げ槍が胸を貫通した、と。「迂闊な子だこと」と伯爵夫人は小姓の言葉を遮つた。「万一殿が功名心に駆られ、我をお忘れになるようなことがあつたら、私を愛していらつしやることを思い出させて差し上げるよう、そなたに固く言いつけはせなんだか。そなた、口を噤んでいてご意見申し上げなんだのかえ。それとも旦那様がそなたのお諫めにお耳を潰しておられたのかえ」「そのいずれでもございませぬ、奥方様」とイルヴィンは応えた。「私はまだ何もかもお話ししたいしておりませぬ。背の君様の傍らには御弟君のオルデンブルク伯爵ゲルハルト様が馬を進めておられました。前日漸く物の具をお付けになつたばかり、これから武器をお試しになるところ。勇氣満満、血氣溢れんばかりで敵の槍袵に突入、周りを取り囲まれてしまわれたのです。何百もの剣がどつと襲い掛かりましたので、羽根飾りは飛び散つてあえかな綿毛と化す始末。ハインリヒ伯爵様は義理の弟御が危険に曝されているのに気づかれると、お乗りの牡馬を励まし、飛鳥のように救助に赴かれました。そこで私は

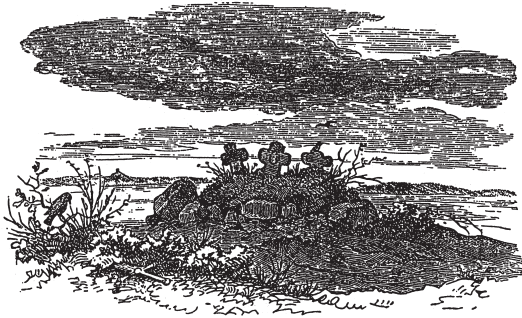


声を限りに叫びました。「お控えを、殿、お控えを。いとしい奥方様をお忘れなく」と。しかしご主君は私の言葉など気にも留めず、率いる騎士の面面を振り返り、こう言われたのです。「掛かれ、おのおの、余に続け、高貴な若武者の命が危うい」。たちまち殿は囲みの真つ只中、苦境の御弟君をきらめく盾で庇い、強い腕を振るわれてびっしり並んだ槍を右に左に薙ぎ倒し、さながら収穫時に人夫の大鎌が実った麦の穂を刈り入れるよう。ゲルハルト伯爵様はごったがえす中から自力でもがき出て、ご家来衆に乱戦から救われました。しかしお救いになった方は斃れ、死神の餌食にされたのでございます。殿の臉フェイス甲アールを開きますと、あなた様へのご遺言をお受けいたしました。殿は私にお気

づきになり、優しく私を見つめ『実のある主には実のある従者』とかすかな声でおっしゃり、私に手を差し伸べられました。「イルヴィン、家へ帰れ。伯爵夫人に余の今生の別れを告げよ。余のことをあまり泣き悲しむ必要は無い、と申せ。かねての約定通りだ。ああ、そなたがすぐに余の許に来てくれたらう、心底いとし余のユッタ」。こう言われるなり伯爵様は亡くなられました。私はこの目でしかと見届けました。殿の清い魂が軽やかな影のような形を取り、お口から空に向かってふわふわと昇って行かれるのを。そしてこれが起こった時、太陽は中天高くにございました」。

当然分かるように、この物語は打ち拉がれた寡婦の涙腺に激しく作用。彼女は大声で嘔び泣き、睨り泣き、苦く塩辛い涙でその目を泣き腫らした。こうした新たな心痛を奥方様に与えまいと、お付きの女性たちは小姓に

退出するよう言いつけたが、伯爵夫人は、留まれ、と手で合図をした。「ああ、イルヴィン、可愛い小姓、私はそんなのご主君のことをまだ十分聴かせてもらっておらぬ。更に語り続けよ。殿の亡骸は乱戦の最中、馬どもに踏み躪られたのか、荒れ狂う敵に切り刻まれたのか、それとも、まこと勇猛果敢な騎士に相応しく大地に埋葬されたのか。可愛い小姓、そなたの存じておる限りを語って聴かせるがよい」。イルヴィンは、一部は美しい伯爵夫人に対する同情から、一部は良き主君の死を哀悼して、乳と花のように白くそして赤い両の頬から滴り落ちるがままにしていた涙を振り払い、このように口上を述べ続けた。「背の君様のご遺骸が踏み躪られたり、非道な扱いを受けた、などと思ひ誤りたまいませぬよう。伯爵方の同盟軍は戦場を確保、赫赫たる勝利を獲られました。合戦が終わりますと、伯爵方はいずれも馬をこちらへお寄せになり、血盟のご兄弟であった殿を悼み、亡骸を聖遺物のように恭しく迎え取って、いとも壮麗豪華に埋葬の儀を営まれました。ただ、殿のご心臓は別で、これは防腐措置を施すよう医師どもに渡された次第でございます。と申しますのは、貴人方の同盟は決定なさったのです。これを名誉の使者に託し早急にあなただ様にお届けいたす、と。全軍が小旗と槍を伏せて佇立し、騎士たちは劍の切っ先を掲げました。葬列が通り過ぎる時、厳かに肅然として。軍鼓は鈍い告別の連打を響かせ、シャルマイ吹きはこれに合わせて葬送進行曲を吹奏いたしました。一人の式部卿が黒い式杖を携えて先頭を進み、これに続くは四人の高位の騎士。最初の騎士は甲冑を、二番目の騎士は鋼鉄の盾を、三番目の騎士は輝く剣を捧持、四人目は何も持ちませぬ。これは喪者で、喪服を纏って歩み、深い苦惱に首うなだれておりました。伯爵方と貴族の殿輩は、上に緑なす月桂冠を載せた、三十と二の紋章が掛かる黒布で覆われた棺に随き従いました。ご遺骸が墓穴に釣り下ろされ、喪装の殿輩ご一同が、御霊安かれ、と天使祝辞および主禱文を黙禱し終わりますと、がさつな墓掘り人どもが熊手で土を掻き寄せましたので、重い土くれがぐもった音を立てて棺の上に転げ落ち、その恐ろしい響きは死者をも目覚めさせそうで、私は胸を刺される



思いでございました。お墓の墳土には芝草が張られ、三本の石の十字架が立てられました。一本はお頭の方に、一本はおみ足の方に、してもう一本は中央で、ここにドイツの戦士が埋葬されている、という追憶のため(2)。

忠実なイルヴィンのこうした詳しい報告は、その女主人の美しい目から更にまた新たな涙を誘い出したが、彼女はそれでもなお満足せず、きちんと知っておきたくて堪らぬ無数の細かい状況を根掘り葉掘り穿鑿するのだった。なにせ懊悩している人人は自分たちの悲哀をより完全に描き上げたがるもの。そうすると苦しみは結局陰鬱な喜びを覚え、

これが一種の心の張りとして役立つ。イルヴィンは連日伯爵夫人に同じ話を繰り返さなければならなかった。そして彼女は全くどうでもよいような些事に至るまで問い質すのだった。たとえば、葬列の騎士たちが左の腕に巻いていた喪章の長さど幅はどれくらいでした、とか、生地は縮緬それとも絹、とか、悲しみの駒に使われたのは黒馬だったの、とか、喜びの駒は白馬でしたの、でなけりや、河原毛、栗毛、斑馬だった、とか、あるいはまた、柩の把手は錫鍍金か、銀鍍金か、といったあなばいで、この類の興味ある話題がもつともつと。しかしだれ一人奥方を悪く思う者はいなかった。なにしろ喪に服した宮廷のこと、こうなるとちよつと変わつたことでも一同には逝去そのものより気をそえられることがよくあるものだからで。伯爵の心臓の防腐保存を依託された薬剤師や外科医たちは、処置にたつぷり半費を費やした。これに必要な香料は当時入手が難しく、異国のさまざまな土地から取り寄せねばならなかったからか、医療同業組合にあっては、他人様を喰いものにするとなると、極めて悠然と施術に取り掛かるのが習慣だったからか。その代わり心

臓はみごとに香料漬けになたので、しまい込まれた壺は香り箱として飾り棚に置いたとしたって何の不思議も無かつたことだろう。しかし愁いに満ちた寡婦はこの神聖な遺物をそんな軽佻浮薄な用途には使わず、林苑に雪華石膏とイタリア産の大理石で壮麗な記念碑を築かせた。その天辺には伯爵が出陣した折の姿そのまま、完全武装の立像が屹立し、枝垂れ柳と香膏白楊がこの奥津城に蔭を落としていた。伯爵夫人はその基部の周りにたくさんの素馨と迷迭香を植え、斑岩の櫃に収めた夫の形見を碑の玄室に置き、そのぐるりを毎日切り立ての花で手ずから飾るのだった。しばしば独りで嘆き悲しみながら、しばしば小姓——伯爵の逝去と埋葬の儀式の顛末を繰り返さなければならなかったが——に供させて、彼女は愛の信実の聖域に何時間も座っているのだった。ある時は黙りこくって何かに耳を傾け、ある時は冷たく憂鬱にしんとして、ある時はもっと暖かな感情に浸され、苦悩と涙を降り注いで。時折彼女の感情は奔騰して言葉となり、その音律美しい唇から死者への哀悼が溢れ出すのだった。

「いとしいあなたの魂が、この遺物壺が納めている現世のお体のうちで一番尊い部分の周りに漂っていらつしやるなら、そして、それと気づかれずとも信実の愛の涙を見届けて下さっているなら、あなたの心のお妻にお姿をお隠しにならないで。あなたは日にこそ見えね喜んでおいでだ、という慰めを戴きたい、と切なく焦がれておりますこの妻に、何か五官で分かる徴をお示しになって、あなたがいらつしやることを私に感じさせて下さいまし。優しく撫でてくれる微風になって、この泣き腫らした目を和やかに煽いで冷やして。それともこの洞窟の大理石の壁沿いに高い天井まで穹窿が聳るほど厳かに轟轟と吹き上がってちょうだいな。

軽やかな霧に包まれて私の前をお歩きになって下さい。あなたが雄雄しい足取りでいつものように進んで行かれるのを私の耳が聴き取れるように。それとも、あなたのお姿を見て、私の目がもう一度無上の歎びを味わえるように。

ああ、死の沈黙とお墓の静けさが私の周りに立ち籠めている。そよとの風も吹かない。小さな葉っぱ一枚ざわめか

ない。命の息吹、命の気配はこそとも動かない。

天界とこの世の果てしない隔たりがあなたと私を隔てている。あなたの不死の魂が逍遥なさっているのはあのきらめく星の彼方。私のことなどもうお忘れになって。私の嘆きをお聴きにならぬ。私の涙をお数えにならぬ。私の苦しみを優しい愁いを籠めて見下ろすこともなさらぬ。

おお、悲しや。凶運が私たちの固い誓いの盟約を引き裂くとは。移り気なお方、あなた、私をお見捨てなのね。心浮き浮きと青い気圏に昇って行ってしまわれるのね。惨めなこの私とは申せば、この鈍重大地に繋がれて、あなたに随いては参れませぬのに。

ああ、私はあの方を失くしてしまった。永久とこしよに失くしてしまった。全霊を挙げて愛していたひとを。ご愛情の炬火たきまろが永遠の入り口で消えてしまったわけではない、という慰めを何かの徴で与えてやろうと、あの方の魂が下界へお戻りになるようなことはありはせぬ。

森たちよ、私の嘆きを聴いておくれ。そして、おまえ、岩の子ども、忠実な笹よ、その嘆きを遥かな草原たちとさらさらとせせらぐ泉たちに伝えておくれ。私が背の君を失くしてしまった、永久に失くしてしまった、と。

癒いし難い懊悩いよ、この苦しみで一杯の心臓を齧かじっておくれ。私の命を食べ尽くしておくれ。そうしたらお墓が私の肉体を受け取るでしょう。私の責め苛まれた魂は不朽の住まいであの方にお目めに掛かることでしょう。そしてもう愛してはくださらないあの方を見つけて、永劫の時を悲しみ続けるでしょう」。

まる一歳ひととせというもの、悲嘆に昏くられる寡婦は来る日も来る日も記念碑に詣もよほで続け、その心が生むさまさまの熱狂的な思いつきに没頭した。彼女は相変わらず、夫の靈魂が愛に惹かされて天上の至福のお膝元を離れ、片時この下界に戻って来て、何か徴を示し、自分に変わることのない誠実さを保証してくれるのではないか、とのひそやかな希望を育



んでいた。彼女は毎回死者への哀悼を繰り返し、遺物壺の許で夫を偲んで新たな涙を流した。こういう飛び抜けた愛の信実のお手本は近隣の人人を感動させた。

ハラミユントの貞節なユツタの噂が語られる版図に住む寡婦^{やもめ}たちは皆、もう顔も定かでなくなっていた死の獲物「亡き夫」のことを仕方なくもつとちやんと思いつき起こさざるを得なくなり、そのお蔭で、とつくの昔に忘れ去っていた伴侶のことが心楽しく記憶に甦^{よみがえ}ったことも少なくなかった。相思相愛の男女でさえこの靈廟で麗しい盟約を交わし、これによって誓いをより堅固に、より厳肅に結べた、と思った。そして夥しい恋愛詩人^{ミンネンサーガー}や多感な乙女たちが美しい月明の宵宵にここに群れ集い、ハラミユントのハインリヒ^{デテ・ツァツケレ}勇^{ナハティガル}敢^{ナハティガル}伯と貞節なユツタの愛を歌うのだった。亭亭^{ていてい}と聳える香膏白楊^{バルサムやまならし}からは夜鶯^{ナハティガル}がもろともに妙なる恋の訴えをこの^{じょうじょう}嫋嫋とした歌唱に添えたもの。

もつとも詩人や彫刻家の寓意的な頭は、あらかじめよく考えて、希望を何か錨^{アンカ}みたいなもの「希望の拠り所」の上に置き、確固不動は支柱で表現、激しい情熱には、頬を一杯膨らませた風の神とか荒れ狂う海の激浪を、彼らの具象的な描写の代表として割り当てるけれども、こうした象徴の選択はしっかりした経験に基づいてのことらしい。執拗な嵐だつてしまえば飽きてしまふし、逆巻く大海原は再び鏡のような水面を取り戻す。

同様に想念の波瀾に富んだ活動も心の中で穏やかに、息の長かった情熱もくたびれるもの。暗雲は消え失せ、地平線はまた晴れ上がり、予報は、お日様が照って、からつとする、と告げてくれる。一年経つと、あえかなユツタの

哀悼の言葉が記念碑の玄室ホシルから響いても、それは以前ほど声高でも頻繁でもなくなつた。天氣が悪かつたり、リュウマチの発作のごく微かな徴候でもあつたり、あるいは何か別の差し支えが生じたりすると、日參を休むようになった。そして、これまでの習慣を回避する口実を思いつけないと、無感動に奥津城に赴くのだつたが、これは尼さんが、止むに止まれぬ気持ちから誓約を果たすというより、それが慣わしだから、てなわけでミサに参加するがごとし。目は涙を流すのを嫌がり、胸は吐息を洩らすのを拒むようになった。押さえ付けられていた溜め息がまだ外に出ることがあつても、それは以前の情念の弱弱い残響でしかない。いや、それが知らず知らずの感情の迸りであつても、骨董とは何の所縁ゆかりもありはせぬ。そこで誠実なユツタは、その溜め息がいつたい何を意味したのやら、胸に問うてみて、顔を赤らめるのだつた。そうこうするうち彼女は、哀悼することによつて背の君の魂を現世に呼び戻して、婚姻契約のあの秘密条項を改めて確認しよう、という熱狂的な考えと綺麗さっぱり縁を切つた。

つまり善良な伯爵夫人が己おのが心と協議してみたところ、若い寡婦にあつては別段異常なことではないが、心変わりをつかまつり、以前その影響下に置かれていた遊星が沈み始め、別の星が地平線高くに昇つて来て、その魅力をこれに及ぼしつつある、ということを見つけたわけ。黒い瞳のイルヴィンが、自分ではそれと知らずに、こうした変容を起こしたのである。本来彼の役割はただ、部屋の扉が開かれると女主人の先払いをし、奥方が裳裾を持たせる時には、これを捧げて随き従うだけに過ぎなかつたのだが、主君が逝去してから、週に何回かは殿に弔辞を捧げるといふ副業をも兼ねるようになった。悲しみで一杯のユツタに伯爵の最後の数刻についての物語を繰り返さねばならなかつたが、弁才に長けていたので、彼女は耳を傾けて決して倦まなかつた。彼はしよっちゅうこれまで記憶になかつた小さな逸話を思いつき、伯爵がいまはのきわに言つたりしたりしたことをきちんと整えたばかりでなく、魂が伯爵の肉体から去る数瞬、彼が何を考えたようだつたかも付け加えたもの。小姓は、自分が見た、と主張する故人の動作・身振



りの一つ一つを解釈説明、それから何かこう伯爵夫人の耳に快いものを引き出すことができた。すでに死と生が争っていた時もまだ殿のご念頭には奥方様の魅惑のお姿が浮かんでいらしたのは、殿の御眼おんめから読み取ることができました、と誓言することもあれば、幽魂が奥方様の気高いお苦しみの比類ない魅力をご覧あそばし、姿は見えずとも、奥方様の優美なお涙を典雅な両の頬から接吻くちづけで取り去るという無上の歓喜をお感じになればよいと口にしたたり。またある時は、どこぞの騎士が栄光の道で命を失うようなことがありましたら、かほど愛らしい御眼の涙を注がれば何と幸福でございましょう、と褒めそやし、私、これほど貴重なお涙ならその一粒に自身の命を捧げても果報だと存じます、と高高と言つてのけるのだった。

最初、懊惱がまだ新ただったうち、伯爵夫人はこうした言葉に大して注意を払わなかったが、その後は無邪気に楽しむようになり、しまいはこれらの甘美な科白が何ともお気に召したので、きちんと身じまいを調べ、魅力をいや増しにして讚美者を誘い、故意にそれを引き出そう、との風情になった。激しく夫を哀惜して容色を損なう苦痛を招き寄せたわけだが、このあらゆる盛りの魅力の破壊者はまことに控えめで、彼女に対しては悲しい職務を遂行しなかつたのである。窺うかがれた双眸まごぼは頬の薄紅うすくれないの色合いと微妙に調和し、波打つ胸の白鳥の輝きは黒い喪服とこよなく見事に対照を成したので、抗い難い魔力が彼女の麗しい容姿をびったり包んだ。何せ、その道の通つうの判断によれば、佳人は半ば愁いに沈んでいる方が、燦然と光輝に満ちている時より、効果が大きいあることがしばしば、とのこと。色好みのイルヴィンのこと、もしこれほど夥しい魅力を目の当たりにして何も感じ

ないまんだつたら、目玉の持ち合わせがない、とか、お小姓なんかじゃない、つてことになる。この坊や、どの花も自分のために咲いてるんだ、という蝶みたいな考えの持ち主。そうした花が垣を廻らした林苑育ちだろうと、草原の野の花だろうと、どちらでもお構いなし。極彩色の羽のお蔭で、と彼は考えたもの。ぼくは垣根と壁を越えてひらひら舞うことが許されてるんだ、と。当然ながら女主人に払っている崇敬の念のために、彼の情熱は心の格子の中に閉じ込められてはしたが、目と目が合った時の顔の紅潮、仕草一つから彼女の意向を忖度そんたくしようとする努力、これらを遂行しようする熱心さ、そして彼女が彼と打ち語らうたびに、いつも何か快いことを言おうとする欲求、これらが、女主人に対するこの並並ならぬ愛着には誓約した義務とは違った動機があることを十二分に暴露していた。そして伯爵夫人は造作も無く、その属する性には当たり前前の解釈学上の識別力を用いて、その秘密を悟った。こうした発見は一向不愉快ではなかったので、彼女は、決して言葉で説明されることの無いこの沈黙の恋を、無邪気な気晴らしとして——なぜなら、うら若い寡婦と申すものは雉鳩⑩の雌のようにしよっちゅう亡くなった連れ合いを偲んでくうくう嘆き悲しんでいられはしないから——続けようとした。ところが、育はぐまれた火花は奥方の胸に多量の火口ほくちを見つけて、すぐに燃え上がって明るい炎になった。狭いイルヴィンは女主人の恋心に気づいてひそかに喜び、これまで夢見ること禁じていた空想が今や思案の真剣な対象となった。そして小姓らしいあつかましきで、もしかしたらいつの日か奥方の夫になれるかも知れない、と思った。初めての恋の予感が彼の好色な心の中でこの考えを煽ったので、とことんまで運試しをしてやれ、と乾坤けんえん一擲いつてきの勝負に出る決心をした次第。

ある時伯爵夫人のお伴をして記念碑に出かけた彼は、いつもは大抵長いこと愛のさまざまな情念について奥方としんみり語らうのだったが、彼女の目つきや身ごなしから相手がこの哲学的論述をどのように応用しようか、と思ひ耽っているのを察知、かねて準備の主題に素早く移行した。「奥方様」と口を切つて「人はこの世に常住の地を持ちま

せぬし、なべてのものにはその時機がございます。このことを私、よくよく思案つかまつりました。それゆえなにとぞしかるべくお暇を賜りますよう、切にお願い申し上げます。子ども靴を履き潰し「大人になり」ましたからには、父祖の先例に倣い、物の具を着け武器を執る潮時が参った、と思われますので。裳裾を捧げて上臈に随き従うのはこれからはもはや私には似合わしくない、と存じます。「ああ、好い子のイルヴィン」と伯爵夫人が応える。「どうしてかように突然、私に仕えるのを止める、などという気におなりだ。私がそなたに従者としてきちんとした扱いをせなんだかえ。ありとあらゆる寵愛を振りまかなんだかえ。物の分かった女主人が召使に示すのが当然の鼻屑ぶりをのう。言つてご覧。何かそなたの気にお障りか。どうして私の許から去りたくなつたの」。

イルヴィン

あれこれ辛うてなりませぬ、

締め付けられる思いです、何やらこの身も存じませぬが、

辛うてならぬは心の苦しみ、

胸がきゆうつと切なくて。

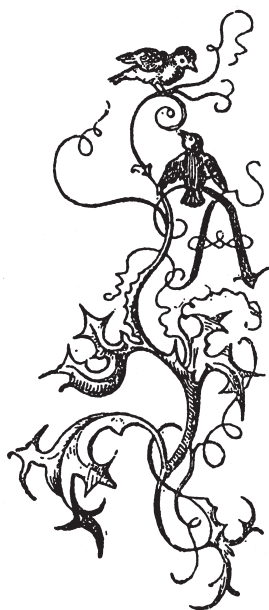
広い世間に出て参らねば、

谷越え野越え一散に。

心が憧れ止まぬのは、

この地ハラーミュントにて

目にし見つけたものだけなのに。



伯爵夫人には好い子のイルヴィンの苦悩がひどく胸にこたえた。もつとも、彼の状態に同情よりも喜びを覚えたのだが。ただもつとはつきりした説明を彼から得たいので、更にこう問い質した。「どうして気持ちが悪く落ち着かないの。名誉と騎士の位に焦がれているの。それともこの寡婦相続⁽¹⁾の単調な暮らしに飽き飽きしたの。あるいは青年客気とやらの煽られてか。でなけりや当てにならない情熱の火花がそなたの胸に燃え出して、それがそなたを責め苛んでいるのかな。さあ、正直に言っておしまい。心の中に吹き荒ぶのはどんな嵐なのかをね」。

こちら

思し召しなら、そういたしましたよう。

締め付けているのはこのお仕着せ。

従者としてのご奉仕はもうたつぷりといたしました。

憧れ止まぬは主^{あるじ}の権限。

薔薇が花咲き、またかしこには

高貴な葡萄が実るうとも、

何の役にも立ちませぬ。

見ているだけで手に取れぬなら、

楽しんでいと申せましょうか。



伯爵夫人はこうした言葉の意味を完全に理解したし、イルヴィンが胸中にどんな望み、願いを育んでいるか、はっきり悟った。小姓はこれをいかにも美少年らしい気質からこれ以上あからさまに女主人に打ち明けるのを憚ったのだ。彼女は、礼節の掟に踏み込むことなく、その願望を続けさせたい、と思ったので、しぐさには後者を伝えることを、口には前者を実現することを委託した。いくらか恥らう風情で目を伏せ、蝶結びの布紐を引っ張って整え、優しく顔を赤らめてこう言った。「薔薇は花咲き、葡萄は熟します。いずこの胸がそれで身を飾りたがっているか、いずこの口がこれを欲しがっているか、かけかまもなくね。その香りで爽やかな気持ちになり、それを見て愁いを忘れるだけでそなたには充分。物の分かった人なら眺めて愉しみ、うっとりとして通り過ぎるもの。物の分からね輩が、屈きもしない葡萄の房を取ろうと手を伸ばしたり、薔薇を手折ろうとして棘に刺されたりするのですよ」。性急なイルヴィンにしてみれば、美貌の寡婦の口から出たこうした寓意的なお説教は、彼女が作ったしなの情念学的表現に比べ、どうも期待が持てないものだった。あつかましい小姓は黙り込み、嘆息し、憂わしげに目を地面に落とした。奥方は大層おもしろがってこの身振り狂言の真似をした。けれどそれからもの数日と経たぬうちこの郷土は堂堂と物の具に身を固めた。伯爵夫人が彼を武装させてやったのである。そして物故した主君の愛馬にひらりとまたがり、意気揚々と初めての武者修行に出で立った。

この不在、イルヴィンの恋にとつて不利なわけではなく、むしろ有益だった。間もなく伯爵夫人は物寂しい寡婦相統領での暮らしが退屈になった。哀悼を捧げる際、そこに同情して立ち会ってくれる人間がもはやいなくなったからである。彼女の苦しみはもう糧を見つけれなくなり、全く別のさまざま考えが心を占領。かつてあんなに固く絡み合った愛の結び目を解こうか、と真剣に思索し始めた。そして象徴的な意味合いを重視していたから、それが実行可能かどうか、楽しい暇潰しとして試してみよう、と思いついた。独りぼっちの時、彼女は胸に下げている心臓型の

黄金細工を開き、中にしまっておいた愛の信実の証を取り出し、長いことじつくり眺め、隠れた縫いの脈絡を探り出すと、紐をゆったりとほぐして行つた。彼女の器用な指はとても熱心に働いたので、外側の紐を緩めるのには本当に成功。しかし中の芯となると、これはもうなんと工夫しようが骨を折るうが全然受け付けない。とうとう根気が尽きてしまうと、仕事を仕上げずじまいにするは何としても厭だつたので、よく切れる鋏を助太刀に頼んだ。これはアレクサンドロス大王の剣がゴルディオスの結び目を解くの役に立つたのと同じ奉仕をしてくれ、固く絡み合つていた愛の結び目も解き得ることについてはもはや議論の余地は無かつた。

善良な伯爵夫人の見解では、これで今やすぐにでも新たに結び目を作り、黄金の護符の中にしまいこむ権利をちゃんと授かつたわけ。なにしろ最初のがもう無いんだから。しかし、さて仕事に取り掛かるうか、というよりよつて一番まずい時に人騒がせな疑念が胸に萌した。愛の結び目は、と彼女はひとりごちた。なにしろもともとこの世での結び付きの象徴に過ぎないし、こうした絆は簡単にほどける。鋏が真似たことを死神がすでに大鎌でやつただけからでもあの世のことで立てた誓いについては多分事情が同じじゃない。心が二つに分かれてどうして私、永劫の間を持ち堪えることができましょう。どっちも、全部に権利がある、と思つている二人の持ち主にしよつちゅうやいのやいのと責め立てられて、と。困り切つた彼女は何日も不機嫌で憂鬱になつた。そしてこうした良心の問題ではどうしたらよいか見当が付かなかつたので、天上のことについては自分より詳しい知識がある、と信じている、さる尊敬すべき御仁に心配ごとを持ちかけよう、と決心した。

エルダクゼンの修道院長は敬虔で深い学識があるとの評判だつた。彼は精神界に関するどんなに先鋭な質問でもスコラ哲学派の睿智で解答することができた。だつてね、縫い針の先より尖がつてるものなんてありやしないでしょう。でもこの熾天使のようなお坊様は、どれほどの数の天使がこの休み場に座れるか、講義できたんだ。だから天国にお



えるのは大のお好き。とりわけお相手が若くて綺麗ならね。「何に心騒がせておられるな。淑徳高い奥方様」と彼は訊ねた。「そなたのひそかな悩みを仰せられい。さすれば、神の下したもう慰めでお元気にさせてあげられるでな」。こちらは応える。「愛が私に無理強いたしました軽はずみな誓いに苦しめられております。私、奥津城の彼方でも夫との婚姻の絆を新たに作る、そしてそれを永遠に是認する、と約束いたしました。けれども人生の春の盛りの若い女子は己が心を思うがままにしてもよろしいのでは。私、寡婦として青春を寂しく哀悼して過ごすべきでございましょうか。叶えられるかどうか分かりもせぬ希望を待ち焦がれて。お教え下さいまし、尊師様、愛し合う者たちはいつの日にか再び愛の中で巡り会うのでございましょうか。それとも、この世で結ばれた約束事は全てあの世の暮らしては帳消しになるのでしょうか。「もとより、もとより」とでつぶり肥えた修道院長。「なべてこの世の盟約はエデンの園では無効です。そりゃ分かり切ったことじゃ。それについてまだご疑念がおりかのか。ご存じないのか、奥

ける婚姻の諸権利に関する情報だつて、どうして提供できないわけがあるうか。伯爵夫人は馬車の用意をさせ、不安に胸を轟かせながら賢い修道院長の許に赴いた。「尊師様」と彼女は言った。「妙な気懸かりがございまして、あなた様のところに参りましたの。私にご助言とお教えを戴けますよう、ありていにお話し申し上げとう存じます」。エルダクゼンの修道院長は物事を哲学的に根掘り葉掘り穿鑿するにも関わらず、美しい性「女性」はお嫌いではない。そこで心に懸かるよしなしごとを抱えて自分を頼つて来るご婦人方に慰藉を与

方様。天界では求婚するもされるも無いので。至福の懐の中でどうして結婚など行われよう。結婚ちゅうのは悲哀ですからな。だってほれ、この上なく幸せな結婚だって経験の証明するところによれば気まずい一刻があります。だがの、夫婦のいがみあいか膨れつ面なんぞが平穩の住まう場所に似つかわしかろうか。あなた様がたの絆は死によって引き裂かれた。あなた様は空の小鳥のように、あるいは、獵師の網から逃れた森の鹿のように、晴れて自由の身でござる。したが、無思慮な誓約のために良心を苦しめておいでなら、それにも良いことを教えて進ぜましよう。聖なる教会はあなた様をそれから解放する力を与えられております。わしのこの貧しい修道院にご寄進賜れ。さすればわしは司教様からあなた様に特免状⁽⁴⁾が出るようにご周旋つかまつろう。この世でもあの世でも罪を蒙ることなく、必要な限り新たな契りを交わすことができる特免状をな」。

かくして良心的なユッタは望み通り、亡くなった旦那様と結んだ例の結婚協定は儚ない妄想以外の何物でもない、と教えられた。この世のものではなくなった愛についての彼女の学説は全く変容。軽率な誓いだつたのだ、と考えてほっと気が休まり、修道院長との約束をきちんと履行、彼の貧しい修道院に寄進し、それから院長に案内されて豪奢に銀器を並べた食卓に就いた。思いも掛けず鎖を外され、ひりひりするような自由を再び満喫している解放奴隷のように、心浮き浮き晴れ晴れと。彼女の心願はただもうこれに尽きる。男前のイルヴィンが早く武者修行から戻って来ればいいな、したらあのひとと愛の契りを交わしましょう。でも現世の境を越えてまでじゃない。また何かが起こっても特免状が必要にならないようにね、うんぬん。輝かしい騎士の帰還は余りにも手間取り、募る憧れは恋の炎にますます油を注いだ。

恋愛学校では是非が争われている難問の一つは、最初の恋と二番目の恋のどっちが強力があるか、である。この問題、決着を付けるのがまことに難しい。しかし、恋路の感覚を先刻ご承知のうら若い性急な寡婦となると、二番目の

選択の方が愛の魔術的修練期^⑤にあつた最初の場合より常により激しくかつかと惚れ込むというのが妥当な経験則である。優しいユツタは情念をほどほどに抑えることができなかつたので、昔礼節の掙が女性に課した、淑徳と控えめなにかみの慎ましやかな見せ掛けさえためらうことなくなぐり捨てた。

「ああ、イルヴィン、私の目の慰めよ」と彼女は声高くあからさまに嘆息した。「ああ、イルヴィン、こよなくいとしいひと。ああ、イルヴィン、渴きを癒すひと。なんとまあいつまでも戦の庭にぐずぐずしているの。葡萄はそなたのために熟し、薔薇はそなたのために花咲き、賞味しておくれ、と匂いを放っているのに。わたしの胸の周りで優しく戯れている微風^{そよかぜ}さん、急いで私の騎士を追いかけて、私の愛の香をあの一ひとの鎧^{よろい}つた胸に吹き込んでおくれ。あの一ひとが闘いを忘れ、征服を求めて、愛の信実をかちえるようにね」。

微風が親切にこの音信^{おとぎ}を伝えてくれたのか、それとも若い騎士が自分なりの理由で帰途に就いたのか、そんなことはどうでもいいよね。とにかくイルヴィン騎士は不意に帰参。あの大舞踏会このかた居城から追つ払われていたおおつびらな歓喜が彼と一緒にハラミユントへまた立ち戻つた。伯爵夫人は喪服を脱ぎ、この立派な騎士を以前の僕^{しもべ}としてでなく一人の貴人として出迎え、表敬のため盛大な饗宴を開き、ほんのちよつと前にはイルヴィン自身が奥方に勧めた酒杯を彼に献じさせた。近隣から招かれた頭の良いご婦人方はこれについてなにくれとなく囁いたし、炯眼^{げんがん}な人人は——事がおのずと明らかになると、いつでもどうにか分かつていた、と主張するものだが——伯爵夫人とこの優雅な騎士の間には色恋沙汰が始まったのであつて、間もなく結婚式が挙げられて、それを実証するだろう、と推量した。確かにこの人たち、ほんのちよつと前だつたら、貞節なユツタが再縁しない、と百対一で賭けただろう。だが、今となつては、そういう賭けをやってみようという者が見つかったら、喜んで逆の賭けを挑んだらう。周囲の四つの伯爵領の住人はハラミユントの伯爵夫人再婚の可能性と現実性に関する説を形而上学的思慮深さをもって討論した



が、イルヴィン騎士は、恋の獲物を確保しよう、それによって論争にけりをつけよう、と思い巡らした。彼は、愛の翼に乗ってかつての女主人の位置まで昇ろう、と大胆な飛翔を企てた。移り気なユッタは立てた誓いを破棄する第一歩をすでに踏んだわけ。自分を忘れて、位階という名譽の足場の階段を一步下へ降り、世評を無視して己が心の衝動に身を任せる第二歩は彼女にとってもっと容易い。彼女の方も下へ舞い降り、途中で幸運なイルヴィンに出逢い、その願いを聞き届け、彼と懇ろな愛の盟約を結んだ。あと足りないのは聖職者の祝福だけだったが、これとてエルダクゼンのご親切な修道院長が婚約者たちに与えることを快諾。伯爵の一門一統は大いに鼻に皺しわを寄せたが、擧しかめつ面づらは何の役にも。華燭の典の準備が贅を尽くして行われ、

富裕な花嫁御寮は二度目の婚礼に欠けている威儀を綯爛豪華さで補おうと熱中した。

挙式のほぼ一箇月前のある宵のこと、美しい許嫁いとごかけは愛する騎士の腕に縋って随分遅くに林苑を逍遙し、相手に、そなたのために薔薇は花咲き、葡萄は熟しているのよ、と教えていた。のんびりとささめごとを交わすうち、相思相愛の二人は歩いている道筋をついっかかりし、気がつかぬまま偶然記念碑の近くに出ってしまった。霊廟は、伯爵夫人がもう長いこと訪れなかつたので、寂しく深閑として全く顧みられずに立っていた。月はその正面を皓皓こうこうと照らし、不気味な真夜中の

刻限がこの光景をひどくいかめしいものにしていた。婚約したてのユツタがふと目を上げると、その視線は墓の円屋根の上に据えられた立像にはたと出くわした。その時彼女には、冷たい大理石があたかもあのピュグマリオンの傑作のように生氣と人肌の温かさを帯びたように見えた。立像は身動きする気配で、右手を挙げ、戒めるか、脅すかのよくな身振りを示した。こうした不思議を目の当たりにして、誓いを破った夫人の胸はぞくぞくっと戦慄した。彼女は恐ろしさにあとずさり、高い叫び声を立てて騎士の胸に頭を埋めた。イルヴィンは仰天したが、この恐怖のしぐさの原因は何なのか分からなかった。「可愛い伯爵夫人、あなたのあえかなお体がこうも震え戦っているのはどうした」と彼は奥方に語りかけた。「何も怖がることはありません、そなたは、この心臓が胸の中で鼓動している限り、あらゆる危険から御身を守り抜く私の両腕の中にいるのですよ」。「ああ、イルヴィン、いとしい騎士よ」と衝撃を受けた夫人はおどおどした声で囁いた。「お墓の上の像が怖い恰好をして、高く挙げた右手で私を脅しているのが見えないの。死の恐怖が私を取り巻いているこのおぞましい場所から連れ出して」。こういう幻覚は恋に落ちてくるイルヴィンには極めて具合が悪かったから、彼はすぐさま理性的な説明でそれを打ち払おうと努めた。曰く「あなたを怖がらせているのは幻想のたぶらかしに過ぎないのですから、どうかお気を鎮めて下さい。微風にしなつた高い楡（れん）の樹の揺れる影と差し込む月の光の青白い輝きが御眼（まなこ）を欺（あそぶ）いたのです。こういう影と光の交錯が合わさつてあなたの活発な想像力からお化けを作り出したのです。そうして真夜中の刻限の憂鬱な感じが仕上げをしたわけ」。「私の目の迷いだなどということは決してありません」と伯爵夫人が応酬。「像は動いて、誓いを忘れないよう私を脅しました。ああ、イルヴィン、いとしいイルヴィン。私はそなたの妻になることはできませんし、許されませぬ」。この答えは窒息性の瘴気（しょうき）のようにイルヴィンの心に作用したので、彼は生きた心地もせず、息も止まる思いで、言葉が咽喉につかえてしまった。どうすれば麗しいユツタを妄想から引き離せるようか、と一晩中思案に耽（たづな）つたが、考えに考えて

も方策が見当たらなかつたので、朝早く馬にまたがると、お利口な御仁、つまりエルダクゼンの賢明な修道院長の許に出向き、この窮境のために助言を求めた。もともと自分自身では、伯爵夫人が、確かだ、と言いつ張っている奇怪な幻影をどう考えるべきか、さっぱり分からなかつたので。心配ごとを持ち掛けると、修道院長はなにせ当代切つての知恵者のこと、これについて、それは五官の錯覚に決まつておる、と全く理性的な判断を下し、おみこしを上げてハラミユント城の伯爵夫人の許に参上、満足の行くように計らつた。「奥方様、死者たちのことを思い煩いますな」と院長。「死者たちの方も生者たちを思い煩うことはありませぬ。死とともにこの世で愛が交わした契りは悉皆消滅いたしますのじゃ。もし背の君様が天国の窓からあなた様を見下ろすことがおできでしたら、愛の涙が涸れたのをご覧してお喜びになるでござらう。お心がお決めたことにも同意なすつて、ご縁組をことほがれましようぞ」。

かくも啓蒙的な人士が立てた故人の物の考え方に関する仮説は、情念の妄想から出た幻影をエジプト王の夢で瘦せた牝牛が肥えた牝牛を喰らい尽くしたように、迅速かつ簡単に片付ける。中断されていた婚礼準備は再び続行を開始、その日のうちに花嫁衣裳が選定され、仕立てに出された。

しかしながら、記念碑の辺りはどうも妙ちきりんな気配だ、恋人たちの聖殿が数数の幽霊騒ぎで穢されている、との噂がどんどん拡まつた。そこでこつそり逢い引きした恋人たちで、突然の恐怖に襲われ、追つ払われたのも少なくない。茂みの中で何かががさごそ、玄室の内ホールで轟轟という音、葉がびつしり生い茂つた枝垂れ柳の間で青い小さな炎が鬼火みたいに飛び廻り、時時長い真つ白な影法師が記念碑の周囲を彷徨い歩く、といったあんばい。慣わしによつて愛の信実の唄をつかまつらう、とやつて来た一群の竖琴弾きと恋愛詩人が雨霰の石礫つばきに迎えられ、ほうほうのいで逃げ出したことも。玄室ホールの中から烈烈たる炎がごとと噴き出したりもした。まるで灼熱の溶岩流を押し流す火山が下でその恐ろしい口を開いたかのよう。ハラミユント全土でこうした怪談が語られていたが、宮廷では急に強



朝な精神(35)が優勢になり、こんな嘸(はなし)は下らぬおしやべり、お伽話、と片づけられた。宮廷人はこうしたことをひたすら物笑いの種とし、あからさまな事実なのでずばりと否定できない場合は、何もかも理の当然の理由をくっつけて合理化した。けれども日没後恐ろしい林苑に一步たりともあえて足を踏み入れようとする者は皆無。

さて、挙式と定められた日が近づいた。これは夏の最も長い日だったが、にも関わらず、ありとあらゆる豪華な装飾——これは宮廷の祝祭にあつては簡潔なありのままの美しさという律動的調和を常に駆逐してしまう代物なのだが——で花嫁を飾り立てるのにかつが中間に合う程度だった。きらびやかに装ったユツタが贅美を尽くしてお出ましになり、有頂天のイルヴィンに導かれて、面倒見の良いエルダクゼンの修道院長が祭服(イン・ボンテ・ファイ・カリフス)に待ち受けている祭壇に婚姻の誓いを結ぶため向かった時には、すでに夜の翳(かげ)が谷谷や森を覆い、何千ものゆらめく蠟燭が城を照らしていた。高く屹立する城砦には歓呼の声が轟き渡った。なにしろ、伯爵夫人はかねて意を用いてたっぷり施し物をし、召使一同からだもう晴れやかな顔を購(か)つておいたのである。二度目の結婚について非難の色が気振りにも読み取れないようにね。堂堂たる行列はしずしずと厳かに花が撒き散らされた城の中庭を礼拝堂指して進んで行った。ところが、である。礼拝堂の屋根の上に嗚咽(おえろ)する「泣き喚(わめ)き」が鎮座(36)して咽喉一杯に不幸の叫びを上げた。城の番犬どもがこれに合わせて物恐ろしい吠え声を挙げ、近くに巢食(くさく)う梟(やぐらう)が古塔の陰気な片隅からこの不気味な歌い出しに応じた。そこで新郎は、物見の塔の張り出しから豎笛(ツンケンペン)や喇叭(ホルン)を吹き鳴らせ、と笛吹きたちに合図した。伯爵夫人が泣き喚(わめ)きの呻(うめ)きや梟の金切り声を聴かずに済むように。

式は聖なる教会の条規(のじ)に則(の)つて終わつた。しかし、何とおかしなこと。祭壇から食堂へ戻る途中、婚礼(ヒメノイオス)の神に扮した銀色装束の小姓が手に携えて新婚夫妻の行く手を照らしていた婚礼の炬火(たまつ)が突然消えたのである。気の強い連中はどれにもそれらを説明するもつとも至極な理由に事欠かなかつたけれど、気弱な面々は奇怪なできごとを目の当た



りにして不安を口に出さずにはいらなかった。

不気味な真夜中の刻限までは陽気にさんざめいて饗宴が続いた。しかし城の夜警が十二時を触れるやいなや、不意に烈風が吹き荒ぶようなすさまじい大音響が城内に鳴り響いた。窓はがたがたと鳴り、城壁も部屋も壁もびりびり震えたので、食卓の上の酒盃はかちやかちや鳴り、梁はぱりつと軋み、扉はぱたんと閉じたり開いたり。蠟燭は死者に捧げるお灯明のようにおぼろげに燃え、それに反してぱつと燃え立った炎のような異様な輝きが控えの間を照らし、食卓に就いている人人は残らず驚愕した。客たちは全員度を失って沈黙、だれ一人この異常な現象を天然自然に解釈して得心しようとはしなかった。

突然伯爵夫人は声を挙げ、怯えたしぐさでこう叫んだ。「神様、お助けを。なんとということ。ああ、背の君が、伯爵様が、復讐しようとしていらした」。こう言うなり、彼女は椅子の上にながっくりと崩折れ、美しい目を閉ざし、もはや生気を見せなかった。かくも早く葬礼が婚禮の慶びに取って代わったので、ハラミユント城の悲嘆は一通りでは無かった。イルヴィン騎士は衝撃のあまり石みたいに棒立ちになり、記念碑の上に聳える大理石の立像のごとくみじろぎもしなかった。医師たちが呼ばれ、死んだ奥方を生き返らせようとしたが、彼らの伎倆も骨折しも無駄だった。魂の抜け去った肉体は二十四時間本来の暖かさを保っていたが——こうしたことは恍惚状態で亡くなったり、アルプ魔に圧死させられたり、あるいは亡霊に縊り殺されたりした者には起こることだそうだ——靈魂はすでに逃げ出して、永劫の世界へ赴く途中だったからである。医師たちの手腕は麗しい亡骸を腐敗から守るには事足りて、彼らはこの上なく熱心に遺骸に防腐処置を施した。とくに心臓はそうで、これは墓の玄室ホールの遺物壺にしまい込ま

れた。そういう次第で、生きている時離れ離れにならないことを互いに誓った心臓は、没後も一つになったわけ。けれども二つの魂が彼岸において現世で台無しになった愛の契りを更新したかどうか、そして遺物壺の中の心臓のように再び結び付いたかどうか、それについては今日に至ってもなお信頼するに足る情報は下界に届いておりません。

原注

(1) 周知の椅子台戦ペグイムによるトゥーロンの大舞踏会。トゥーロン(16)で気体静力学上の「気球を上げる」催しフェットが開かれた折、観衆の中の悪戯者が、失敗に終わった実験の代わりに、土くれを投げ上げよう、と思いついた。土塊はたまたまある不機嫌なアイルランド兵(17)の頭に命中。こちらはこの投擲ちうちに報復したが、丁度他の物が手元に無かったので、座っていた椅子を使うことにして、これを土くれが飛んで来た方向に放り投げた。椅子はたちどころに非難の声とともに投げ返された。かくして空の燕の群のごとく椅子が飛び交い、吐き出された歯は雨霰。数多くの人間と椅子の脚が折られ、祝祭の最後を飾るはずだった待望の大舞踏会はおじゃん。

(2) 三本の石の十字架が立てられました……思い出のため、この三本の石の十字架はいまだにシュテディンガーラントの国境の野の古戦場に見られる由。さて、同様の印の塚が戦場の随所に発見されるが、語り伝えによれば一般にその下にはだれか昔の戦士が埋葬されているというのが常。

訳注

(1) マルブルー風お伽話 *das Märcchen à la Malbrouk*。当時ドイツでも人口に膾炙くわいしやしていた有名なフランスの軍歌「マルブルーが戦に行った」*Malbrouc s'en va-t-en guerre*を踏まえている。これは既に一五六三年頃には知られていた。従ってこのマルブルーは、英国の元首相ウインストン・チャーチルの先祖である初代モルバラ公爵ジョン・チャーチル *John Churchill, Duke of Marlborough* (一六五〇—一七二二)。プレンハイムの会戦(「リニューベツアールの物語」訳注参照)の勝将の一人)とは別人である。表記も *Malbrou, Malbrouc, Malbrouc* であって、近世になって *Ma* (マ) は落ちていゝ *borough* と誤記されるようになった。プレンハイムの会戦(一七〇四)に勝利した英国人將軍の称号と誤って(綴りの方もまた一部誤って)結び付けられたのかも知れない。ムゼーウスは「メレクサーラ」で再びこの唄を引き、そこでは *Marlbrough* と英国人將軍の称号通りに綴っている。この小唄の主人公は騎士か、十字軍士であって、その小姓が女主人に対し、この物語におけるようにその背の君の死を報告する。そして、遣る瀬無い寡婦と野心家の小姓との間に恋物語が展開する。

(2) ライネ川 *die Leine*。北ドイツのアラー河の左の支流。アイヒスフェルト(「誘拐」訳注参照)に源を發し、ライネフェルトで西に流れ、そ

れから北へ向かいゲッティンゲンとハノーファーを過ぎ、アイケルローで合流。全長二八二キロ。

(3) ヴェーザー河 *die Weser*. 北西ドイツの大河。「沈黙の恋」「屈背のウルリヒ」訳注参照。

(4) ハラーミュント伯爵領 *die Grafschaft Halermünd*. 神聖ローマ帝国の伯爵領。ハラームント *Halermünd*、ハラーミュンテ *Halermünde*

とも。首邑はエルダクゼン。一一九一年ケーフェルンブルク伯爵家（屈背のウルリヒ）訳注参照）の手に落ち、一四三六年ブラウンシュヴァイク公国に、一五六九年ブラウンシュヴァイクリリーネブルク公国に帰属。身分と爵位は一七〇四年ブラーテン伯爵家に与えられた。

(5) エルダクゼン *Eldagsen*. ハラーミュント伯爵領の首邑。現ハノーファー州。中世の面影を濃く残す美しい古都ヒルデスハイムの西方にある。

(6) ハインリヒ獅子公 *Heinrich der Löwe*. バイエルン公にしてザクセン公（一一二九—九五）。一二二二年ザクセン公国を、一一五六年領土を削られたバイエルン公国を取り戻し、ミュンヒェンを建設、メクレンブルクとポンメルンを征服、リュベックを建設、ドイツ人の東方領域入殖に与って力があった。ドイツ王、後の神聖ローマ帝国皇帝フリードリヒ二世（赤髯王・帝〔バルバロッサ〕）の数度に亘るローマ遠征に随伴したが、彼の権力が増大するとともに皇帝との仲も冷却、一一七四年のローマ遠征には従軍しなかった。不参加の釈明を求められたが、ハインリヒは出頭せず、ためにゲルンハウゼンで追放刑を受け、彼の封土も没収する旨宣告された。ザクセン公国は粉碎され、一一八一年彼が出頭して赦免された時、取り戻せたのはそのごく一部であるブラウンシュヴァイクとリューネブルクだけだった。イングランドへの亡命から帰還した

一一八五年、ハインリヒは再び叛乱を起こし、バルドヴィークを破壊した。

(7) ブラウンシュヴァイク *Braunschweig*. 北西ドイツの公国およびその首都。「宝物探し」「メレクザール」訳注参照。

(8) かの有名な騎行を行い、元氣潑瀾かつ上上の機嫌でその地に到着した この伝説をムゼーウスは「メレクザール」の中で詳しく物語っているし、「宝物探し」でもちらりと言及。

(9) ハインリヒ勇敢伯 *Graf Heinrich der Wackere*. 未詳。

(10) オルデンブルク伯爵家出のユッタ *Jutta von Oldenburg*. 未詳。オルデンブルクは北ドイツの地方名、都市名としていまだに有名。近隣にはブレメン、リュベック、エムデンのような都市がある。オルデンブルク伯爵については既に一〇八八年その名への言及がある。初めはハインリヒ獅子公の封臣だったが、公が追放されると、エリマール一世の下「一八〇年神聖ローマ帝国の直臣となった。一二三四年シュテティン

ガーラント（ブレメンの西、オホテ川とヴェーザー河の間に広がる、堤防に囲まれた肥沃な湿地帯。オルデンブルクにある）の半ばを獲得、一二五〇年頃デルメンホルスト城を築城。ここを居城とするデルメンホルスト伯爵家も一二七二年に派生する。デイトトリヒ幸運伯（二四四〇没）はオルデンブルクとデルメンホルストの二つの家系を統合。彼の長子クリスティアンは一四四八年デンマーク王となり、第二人に本領を相続させた。オルデンブルクおよびデルメンホルストの名は「宝物探し」の訳注にも出る。

(11) あの素描集の著者 一七八四年ザクセンのハレ・アン・デア・ザールで匿名の著者により『高貴なドイツの女性方の素描集』*Schattensisse*

edler deutscher Frauenzimmer が出版された。

(12) 情感的に sentimentalisch. フリードリヒ・フォン・シラー（一七五九—一八〇五）の造語とされたことがあったが、このようにムゼーウスが用いているし、ヴィーラントにも。シラー—うんぬんの典拠とされたその論文「素朴文学と情感文学について」『Über naive und sentimentalische Dichtung』は一七九五—九六年の発表。

(13) 死の舞踏 十四世紀以降しばしば描かれた図柄。死≠死神（骸骨姿）の人間に対する力が舞踏の形で表される。上は教皇、皇帝、王、枢機卿、諸侯、大司教など聖俗界の権力者たちが、下は職人、羊飼、小作人、農奴、物乞いなど庶民が死神と手を取り合っており、あるいは抱かれて踊るのである。ムゼーウスの時代最も有名だったのは、一五三〇年初めて刷られ、一五三八年以降多数の翻刻によって広まった息子のハンス・ホルバイン（一四九七—一五四三）の続き物の木版画である。

(14) 泉の叫び、鴉の啼き声とともに凶兆とされる。

(15) シュテディンガーの輩 die Steinfänger: 「シュテディンガー」は語源的には「沿岸に住む人人」の意。北海沿岸のフリースラント人、ネーデルラント人などもこれに入る。その勇敢さと剛直な自由愛好で有名。たとえば、十一世紀ブレメンの大司教によってヴェーザー河左岸に移住させられた彼らの一派は、十分の一税（教会税）貢納を拒否して異端と断罪された。一二〇六年以降彼らに十字軍を向けるよう説いた教皇に破門および聖務禁止を、神聖ローマ帝国皇帝フリードリヒ二世（在位一二〇一—一五〇）。「メレクザール」訳注参照）に帝国追放令を宣告され、一二三四年五月二十七日アルテンエツシュ近郊で近隣諸侯が組織した十字軍のため撃破され、大部分根絶された。オルデンブルク伯爵家がシュテディンガーラントの半ばを獲得したのもこの年である。ムゼーウスはこの故事を素材にしたのであろう。

(16) 焼き菓子「誘拐」「宝物探し」訳注参照。

(17) 肉饅頭 捏ね粉で外皮を作り、卵を塗って光沢を出し、中に脂肪、香辛料とともに肉類、魚介類を入れて、天火で焼いた料理。既に一三五〇年ドイツのある修道院の料理書に「異教徒の料理」（イスパニアのムーア人かシリアのアラビア人から伝えられたものか）という名の下に製法が載っている。パテ。パイ。果物入りのパイはドイツ語圏では厳密にはトルテと呼ばれるようだ。もともと「海員トルテ」という帆船をかたどったトルテは、鯨、海老、牡蠣、シヤンピニオンを中身に入っている。

(18) 験甲 ヨーロッパの騎士の兜の上げ下げできる顔隠し。下ろすと幾つもの細い隙間からしか外が見えなくなる。「メレクザール」にも出る。

(19) 復活祭 春分後の最初の満月のあとの日曜日。

(20) 降臨祭 復活祭後の第七日曜日。

(21) 苦行 馬尾毛織り（馬の尻尾の毛を混ぜて織った粗い布地）の下着を身に着けるなどして体を痛める行。

(22) 天使ラファエル der Engel Raphael. 四大天使の一人。「リュートベツァールの物語」「メレクザール」訳注参照。

- (23) 青年トビア *der Junge Tobias*. 旧約聖書外典トビト記にこの物語がある。天使ラファエルは義人トビトの息子である旅するトビアの献身的な守護者となつてくれる。「リユーベツァールの物語」「メレクザーラ」訳注参照。
- (24) タベと朝とはいづも一日となり 旧約聖書創世記一章五節「夕あり朝ありき是首の日なり」など。
- (25) 「創造主」「くくりぬし」なる精霊よ 来たたりたまえ」 *veni creator spiritus*. ラテン語。聖霊を讃える中世の頌歌の冒頭。聖霊降臨祭その他の祭典でタベの聖歌として歌われた。原文では *spiritus* がなぜか省略されているので、訳文で補った。
- (26) 夜鶯 *Nachtigall*. 小夜啼鳥。燕雀目鶉科の小鳥。ヨーロッパ中部から西南部に分布。習性は鶯に似て、灌木林に多く、春、夏には早朝、薄暮、または月明の夜などに啼くのでこの名（ドイツ語の語源は「夜の歌姫」）がある。ヨーロッパでは多くの文学に取り上げられて愛されている。
- (27) 賢人セネカ *der weise Seneca*. 哲学者ルキウス・アナエウス・セネカ（紀元前四—紀元六五）はローマ帝国皇帝ネロの扶育官であり助言者だったが、ある陰謀に加担した、とされ、その廉で死を宣告された。当時の習慣に従い、彼は血管を開くことよって命を断った。つまり執刀医に命じて手首の動脈を切らせ、失血死したわけ。歴史家タキトゥスの記すところ（『年代記』第十五巻）に拠れば、その妻パウリーナも同じく血管を切らせ、夫の死に殉じようとした、とのこと。しかしこれを知ったネロは、彼女に怨恨を持っていたわけではなく、自己の残酷を呪う声が抑まるのを恐れたせいもあり、兵を派遣して救急処置を講じさせ、「おそらく意識の無かった」パウリーナの失血を止めさせた。彼女はそれから数年生き永らえたが、その貞節は賞賛に値する（『タキトゥスは記している』）。
- (28) シヤルマイ 木管楽器。「リユーベツァールの物語」、「奪われた面纱」「宝物探し」訳注参照。
- (29) 喪者 葬列の末尾に位置し、だれもこれに話しかけてはならない。通例故人の親族がなる。覆面していることもある。この場合もしかすると故人の靈魂を象徴しているのかも知れない。
- (30) 悲しみの駒 君公の葬儀の際葬列の先導をする、人の乗っていない、黒い覆いを掛けた馬。「リブツサ」訳注参照。
- (31) 喜ぶの駒 同じく君公の葬儀の際、柩の後を行く身を飾った騎者の乗った馬。跡継ぎを象徴する。「リブツサ」訳注参照。
- (32) 河原毛 *Falbe*. 黄灰色の馬。
- (33) 香り箱 芳香を放つ香草や花を乾したものを入れた容器。
- (34) 枝垂れ柳 *Traneweide*. 直訳すると「涙柳」。
- (35) 香膏白楊 *Balsampappel*. 未詳。「バルサム」は芳香と鎮痛効果のある樹脂と香油の混合物。
- (36) 素馨 *Jasmin*. 木犀科の常緑灌木。インド、ペルシア原産。花は強い芳香を放つ。
- (37) 迷迭香 *Rosmarin*. ローズマリー。地中海地方原産の芳香ある常緑灌木。貞操、愛、記憶、死の象徴。香油の原料となる。「メレクザーラ」

- にも出る。
- (38) この遺物壺 *dieser Aschenkrug*。「アツシエンクルーク」は遺骸を荼毘に付した場合、遺骨と遺灰を入れる壺。ムゼーウスが用いた言葉通りには訳出しなかった。
- (39) 恋愛詩人、中世、特に十二〜十四世紀のドイツの諸宮廷で、恋愛歌を自ら作詞、作曲、伴奏して歌った、主に貴族、騎士階級出身の叙情詩人。ミンネゼンガーとも。
- (40) 雉鳩 *Turteltaube*。鳩きょうとう目鳩科に属する鳩の一種。翼の色は大体雌雉に似る。ドイツには「雉鳩のように仲睦まじい」という言い回しがある。
- (41) 寡婦相続額 *Wittum*。「泉の水の精」では「寡婦相続分」と訳した。いずれにせよ、寡婦が受ける亡夫の財産の相続分。「泉の水の精」訳注参照。
- (42) 美少年 *Ganymed*。ギリシア神話では人間のうち最も美しい少年とされ、好色な大神ゼウスが驚に変身、あるいは驚を送り、天上に攫って来て掌酒子にしたそうなる。「リヒルデ」訳注参照。
- (43) 情念学的「情念学」*Pathognomie*とは、スイスの牧師で人相学者だったヨーハン・カスパー・ラーヴァーター（一七四一—一八〇二）によって大いに価値を再評価された人相学の、情念の作用を扱う分野のこと。
- (44) 郷土 *Ungarn*。ムゼーウスは、貴族ではないが広い土地を持つ有産階級に属する者に、この称号を用いているようだ。「リブツサ」「宝物探し」「誘拐」訳注参照。
- (45) アレクサンドロス大王の剣がゴルディオスの結び目を解くのに役立った。小アジア中西部にあった古代王国フリギアの王ゴルディオスはゼウスの神殿に車を奉獻したが、この車の軛にはがんにがらめに綱が結んであった。これを解く者は全アジアを支配する、との神託があったが、だれひとり成功しなかった。これをアレクサンドロス（紀元前三五六—二三）は剣で断ち切り、難問を解決した。マケドニアに生まれた彼がこの時ギリシア全土を統一していたばかりでなく、この後ペルシアとバクトリアを征服したのは言うまでもない。
- (46) スコラ哲学。中世ヨーロッパにおいてスコラ神学との密接な統合の下、「スコラ学」の一部門を形成した。スコラ学的方法とは一二〇〇年以降の中世の「学校」での教授と学習の共通の方法を指す。それは中世の大学の学問である自由学芸、哲学、神学、医学、法学の諸問題を、相対立する立場から弁証論的に探求し、厳密な知識を獲得して行く方法だった。ただし、スコラ学は偏狭な机上の学問と軽蔑される場合もあった。
- (47) 熾天使。炎と光の天使。六翼天使。
- (48) どれほどの数の天使がこの休み場に座れるか 針の先端にどれほどの数の天使が立てるか、は実際にスコラ学の命題になったことがあるそう

- (49) 特免状 カトリック教で高位聖職者による特別赦免状を言う。「リヒルテ」「メレクザーラ」でも出る。
- (50) 修練期 カトリック教で修道誓願前の試験期。
- (51) ビュクマリオンの傑作 オウイデイウスが「変身譚」(八年頃成立)で語るところによれば、キュプロスの伝説的な王ビュクマリオンは自分自身が彫刻した象牙の典雅の女神に惚れ込んだ。彼の懇請に応じてアプロディーテ(ウェヌス)はこの立像に生命を与え、彼女を王の妃にした。やっつた。
- (52) エジプト王の夢で瘦せた牝牛が肥えた牝牛を喰らい尽くした 旧約聖書創世記四十一章にヨセフがエジプト王の見た夢を占う話がある。エジプト王はナイル河の畔に立っていた。すると七頭の美しい肥えた牝牛が河から上がって来て岸辺で草を食べ始めた。ところがその後から醜い瘦せた牝牛が上がって来て、前の肥えた牝牛を喰らい尽くした、と。ヨセフは、これが七年の豊作と七年の飢饉の予兆である、と解き、穀物の備蓄を進言する。
- (53) 強靱な精神 自由思想、啓蒙思想。「誘拐」訳注参照。なお訳注は付けなかったが「リュューベツァールの物語」にも出る。
- (54) 律動的調和 ギリシア語。「美しい調和」。
- (55) 祭服二威儀ヲ正シテ in pontificalibus. ラテン語。「メレクザーラ」でも使われている。
- (56) 嗚咽する「泣き喚び」 eine ächzende Wehklage. 「ヴェークラーゲ」はザクセン・テューリンゲンの伝説領域では「悲嘆」Wehklageとか「神の悲嘆」Gotteswehklage と呼ばれ、泣いたり歌ったりすることによって迫り来る災厄を告知する白装束の綺麗な子ども、あるいは白い羽根の鶏を言う。「メレクザーラ」にも登場。
- (57) 豎笛 コルネットのような昔の木管楽器。幾つもの孔が開いている。塔の番人や都市の音楽隊の楽師長が用いたもの。
- (58) 婚礼の神 Hymenaeus. ギリシア神話の婚礼を司る男神。炬火を手にして婚礼に立ち合う。
- (59) 夢魔 Alp. 「リブッサ」訳注参照。
- (60) トゥーロン Toulon. フランス南東部の都市。地中海へと開ける水深の深いトゥーロン湾の奥に位する。古代から(おそらく)フェニキア人、次いでギリシア人に交易都市として殖民された。近世にはフランス王国海軍根拠地として要塞化され、現在も重要な軍港。
- (61) アイルランド兵 十八世紀のフランス王国には、英国でのジャコバイトの乱(第一次は一七一五年。第二次は一七四五年)で敗れて亡命したアイルランド兵やスコットランド兵、およびその子孫がかなり暮らしていた。軍に勤務(アイルランド人連隊があった)している者も少なくなかった。これもその一人か。アイルランド人はフランス人と同じカトリック教徒なので生活し易かったし、彼らが仕えた王位継承者(名譽革命で追放された英国国王でカトリック教徒のジェイムズ二世の息子ジェイムズ・エドワード(オーールド・プリテンダー)、そのまた息子チャールズ・エドワード(ヤング・プリテンダー))もフランス王の保護を受けていたからである。

解題

これにはメルヒエン的要素はほとんど無い。ムゼーウスが自由に創作した小説と言ってよろしかろう。マルブルー風お伽話 *aus Märchen a la Malbrouk* なる副題で内容があらかじめ全て仄めかされている。また、この副題についての訳注で解題は既に記されている、と申せよう。しかしながら、この物語をあえて大きなモティーフ一つに煎じ詰めれば、「貞女の不実」である。代表として、西洋では「エペソスの未亡人」、東洋では「莊子とその妻」を以下に挙げておこう。

「エペソスの未亡人」はこんな話。ガイウス・ペトロニウス（?—一六六）の作と言われる『サテュリコン』の中で、語り手エンコルピウスの年長の友人エウモルポスが、貞淑この上ないという評判の女性でも、たやすくあだし男に心を動かすものだ、として物語る。

小アジアの大商業都市エペソスに貞淑で有名な女性がいた。夫に先立たれると悲嘆のあまり、地下埋葬所に安置された屍の傍らで飲食もせず日夜泣き崩れていた。この時、その近くで数人の盗賊が、磔はりつけの刑に処され、屍骸を埋葬しようとして取り下ろす者など無いように、十字架のそばで一人の兵士が見張りをしていた。兵士は泣き声に惹かれて埋葬所に入り、女性をなだめすかし、飲食をさせる。やがて、青年兵士は夫人を口説き落とし、三晩もともに過ごす。その間に磔はりつけに遭った盗賊の一人の両親が死体を取り下ろし、埋葬してしまう。兵士は朝になって十字架の一つに屍骸が無いのを発見、処罰されるのを恐れ、恋人に事情を説明、判決を待たずに自殺するつもりだ、と告げる。女は情

人を庇護するため、夫の屍を柩から出して、十字架に取り付ける。

「莊子とその妻」は中国明朝の文人馮夢龍ふうぼうりゆうの『警世通言』第二巻「莊子休鼓盆成大道」(莊子ほとぎ盆を鼓すを休めて大道を成す)である。これは老獪な夫が妻の貞実ぶりを験そうと策を弄するもの。

夫の死後も婦道を貫く、と誓う美しい妻を残して莊子が死ぬ。その直後一人の貴公子が老僕を供に連れてやって来る。夫の知り合いだ、と言うので、未亡人がもてなしているうち、恋に陥り、これと婚礼を行う。いざ、お床入りとなった時、貴公子が急病になる。老僕は、これが若主人の持病で、薬には生きている人間の脳が必要、もつとも、死人の脳でも死後四十九日以内であれば乾涸びていないので用い得る、と語る。未亡人は、莊子が没してから二十日余りしか経っていない、棺を壊して取り出しましょう、と答え、自分から斧を探し、屋敷裏のあばら家に放置しておいた棺の蓋を切り割る。すると、夫の屍骸がむくむく起き上がる。貴公子も老僕も夫の幻術の所産だったのである。妻は縮死いしする。莊子はその屍骸を壊れた棺の中に放り込み、瓦盆はとぎ(湯や水を入れる素焼きの瓶)を樂器とし、これを叩いて唄を歌う。

以上の二つの物語は、拙著『昔話の東と西 比較口承文芸論考』(国書刊行会、平成十六年)所収の小論「中国清代の一説話とローマ文学の一挿話の似寄りについて」でも扱った。こうした似寄りについて更に関心がおありの向きは、同書について見られたい。

小さいモティーフとしては、婚礼の席へ石像が訪れる「石像の客」も挙げられようか。これは「ドン・ファン伝説」で有名だから、ここではことさらこれ以上言及しない。

終わりに訳者から一言。訳注(25)の頌歌についてはヨーロッパ比較文化学科の同僚望月ゆか助教授にお教えを乞いました。望月さん、どうもありがとうございました。